

パリ映画探索 1997年盛夏

—例会報告その後—

永沼日出雄

1997年8月のフランスは連日晴れ渡り、異常な酷暑が続きました。この夏のパリはダイアナ元王太子急逝の地として多くの人々に記憶されるでしょうが、私が滞在したのは惨事発生半月ほど前です。ジュスパン社会党政権が青年失業者救済のため35万人の雇用計画を発表したこと、またローマ法王のパリ訪問に共鳴して100万人の若者が世界各国から参集したこと以外は、特筆すべきニュースも見あたりません。大学生活や研究機関もバカンスに入り、音楽や演劇の公演はほとんど休止していたものの、首都の映画興行だけはほかの季節と同じように多彩でした。

フランスでも映写室の縮小と統合が進み、レ・アールやクリッシイ広場には十数個の会場を複合した巨大映画館が人気を集めています。カルチェ・ラタンでも一昔前まではサン・ミッシェル周辺に多くの映画館が林立し、長蛇の列を交叉させていましたが、今度行ってみると、広場の一角にただ一組だけ残されていました。しかし、オデオン広場に鼎立する映画館は健在であって、合計11の会場で新作を上映しています。〈カトル・ジュイエ・オデオン〉では女性監督ミラ・ナイールのインド映画『カーマ・スートラ—愛の教科書』など2本のインド映画に魅了されました。この作品は中世宮廷の身分を超えた恋愛を描き、華麗な映像と繊細な表現で今夏とくに評判になったものです。インドの魅力的なミュージカル映画が東南アジアやイスラム諸国で広く愛好されているのに、日本にはほとんど輸入されず、話題にも上らないことは、さきの分会例会でも述べました。しかし、インド映画に関して1997年後半には名古屋でも『カーマ・スートラ』が公開され、2年前チュニジア旅行の際に観た『女盗賊プーラン』も他のインド映画数本とともにパーフェクトTVの番組に組まれるに至りました。

パリでのシネマ探索に豊かな収穫を与えてくれるのは、こうした一般的な映画館だけでなく、セーヌ左岸に点在する多くのアートシアターです。パリ第一大学の東側を走り、ソルボンヌ広場に抜けるシャンポリオン街は、1899年に起源をもつシネマ小路として知られ、そうした小映画館が連なっています。今夏ここでは〈ルフレ・メディチ・ログス〉で上映されたドライヤー監督特集がとくに貴重な企画でした。なかでも10名たらずの観客と一緒に見入った『ヴァンピュアー』は、サイレント時代のデンマークで製作され、山里における怪奇な物語をまことに美しい映像で綴った作品です。こうした作品に感嘆したあと、隣接する首都随一の映画書籍専門店に立ち寄ったり、真向いのシネマ・カフェでホスターやスチール写真の陳列を眺めるのは、この小路でしか味わえぬ悦楽ではないでしょうか。

セーヌ左岸のアートシアターはみな独自の造作や雰囲気を持っていますが、とくに異彩を放つのは、ロダン美術館近くの〈パゴダ〉です。この映画館は中国風の屋敷、円蓋、

庭園、茶館から成り立ち、異国情緒によってパリ市民を惹きつけています。数年前ここで張芸謀監督、鞏俐主演の『紅夢』に私は圧倒されました。今回供されていたのは、炭坑の町を舞台にしたイギリス映画『プラス』とイタリア映画『マリアンナ・ウクリアの沈黙の生涯』です。炭坑に追い込まれる労働者の苦難と彼らの余暇活動であるプラスバンドを描いた前者は、今回のヨーロッパ旅行で出逢った最良の映画と申してよいでしょう。『ウィリアム・テル序曲』の演奏をクライマックスとして、この作品には庶民の哀歎と熱気が満ちみちています。日本でも秋の東京国際映画祭において受賞し、新春の劇場公開も予告されました。新入生を対象とする教養科目『現代の世界の映画』で私は二年間連続してミュージカル映画『コーラスライン』を初回に見せましたが、できれば来年度からそれを『プラス』に差し替えるつもりです。

パリでの滞在は半月ほどにすぎませんが、今度はひとつの新しい課題を携えて来ました。勤務先の同僚と1年前からヨーロッパ統合をめぐる共同研究に着手しており、自分の分担として欧州連合 EU の映画振興政策を現地で検証したいと願ったのです。1990年から欧州連合は映画・テレビ振興計画 MEDIA を推進し、独自の助成機関 EURIMAGES を主体としてヨーロッパ・シネマの製作、配給、興行を支援しています。EURIMAGES の助成によって造られた作品、たとえば『トリコロール 青の愛』、『アンダーグランド』、『愛のめぐりあい』、等々は種々のシネマ・フェステヴァルで受賞し、私たちにもヨーロッパの新しい息吹を感じさせました。しかし、日本ではいまだ未公開のフィルムも多く、オランダ、ベルギー、イギリスの共同製作『アントニア』はモンパルナスの複合映画館で、またデンマーク、ノールウェイ、フランス、オランダの共同製作『奇跡の海』をソルボンヌ＝ヴィクトル・クザン街のアートシアター、〈ヨーロッパ・パンテオン〉で今夏初めて視聴しました。このふたつは欧州連合の基調であるヨーロッパ諸民族のアイデンティティーを形象化し、MEDIA の優れた成果としてつとに聞き及んでいたものです。

欧州連合による映画振興政策には各国のシネマ興行、とくにアートシアターへの経営支援が含まれています。そうした映画館はパリだけで11、フランス全土では44に及びます。『アントニア』を上映する〈ヨーロッパ・パンテオン〉もそのひとつで、哲学者サルトルは7歳のときここで映画を楽しんだと回想しています。同じように由緒のある〈スチューデオ・デ・ジュルスナル〉が欧州連合の助成のもとで現在どんな業務を進めているか、あらためて視察することにしました。世界最初のアートシアターと言われるこの劇場は、第一次大戦の時代からチャップリンの映画などを提供し、シュールレアリズムの影響を受けて幾多の斬新な映画製作に活路を開きました。中世の修道院跡に造られたその建物は、ベル・エポック特有の瀟洒な玄関で際立ち、切符売場と待合室を兼ねる広いロビーは、舞踏会の会場にも利用されたと伝えられます。館内には月毎のプログラム、ポスター、関連資料が掲示され、第一会場のテーマがヨーロッパ映画史の回顧と大書されています。古典的なフィルムの保存と尊重は MEDIA の達成目標のひとつですが、この週には『アジアの嵐』や『にがい米』などソヴィエトとイタリアの作品13本が上映されるのです。第二会場についてはエジプト映画特集が企画され、とくにシャイーン監督の作品が集められました。71歳の長老シャイーンは1997年度カンヌ映画祭受賞によってようやく脚光を浴びましたが、新作『宿命』の封切にはまだ間があります。しかし、〈スチューデオ・デ・ジュルスナル〉では古代の中東を描いた壮大な『移民』を観ることができました。広

漠たるシリアの遊牧民が、農耕の技術を求めてエジプトに赴く物語です。1995年にムフタル街の小映画館〈レベ・ド・ボワ〉でエジプトの古典特集が生まれ、数日そこに通った私は華麗で愉快的なミュージカルのいくつかを知りました。そのプログラムにはシャイヌ監督のモノクロ映画も含まれています。〈スチューデオ・デ・ジュルスナル〉はカルチェ・ラタンのなかでもほかの映画館からやや離れた位置にあります。17年前ここでフィンランド映画特集に浴したことを思い出しながら、近くのインド料理店に寄り、エコール・ノルマル・シュペリエールとキュリー研究所に挟まれたウルム街に出ました。キュリー研究所の中庭に入り込んで、部外者を咎める人はなく、静寂なラジウム発見の地でしばらく休息することができました。

こうして今回のパリ映画探索はフランスで製作された作品にほとんど接しないまま終わりました。ソフィ・マルソー主演『マルキーズ侯爵夫人』等の話題作が数週後にしか封切りされないこと、当地で人気を博したフランス映画は間違いなく日本にも輸入されること、また貴重なフィルムを上映する公営のシネマティークが夏季には閉ざしていることなどがその理由です。パリやロンドンまで赴く意義は、わが国で滅多に体験できぬ事柄に巡り会うことにある、と言えないでしょうか。パリ滞在もそろそろ終える頃、私はトルネル河岸のアラブ世界研究所を初めて訪れました。アラビア模様には飾られた白亜の殿堂と広大な図書室に眼を見張り、螺旋状階段の両側に設置された書庫ではイスラム関係の蔵書の膨大さに驚嘆したのです。しかし、アラブ世界研究所における最大の収穫は、出口の書籍販売コーナーで北アフリカ諸国の市販ビデオを発見したことです。それはエジプト、アルジェリア、チュニジアの代表的な映画を収録し、フランス語字幕を付してパリで発売されたものでした。こちらでも欧米映画のビデオ化が数年来激増し、FNACのような大型書店もなかばビデオ・LD販売店に変貌しています。しかし、アラブの映画ビデオを店頭で見たのは初めてで、それらには先年ムフタル街〈レベ・ド・ボワ〉のエジプト映画特集で提供された作品もいくつか含まれていました。勿論海外で購入したビデオは日本のものと規格が異なり、変換機能を備えた機器でなければ正常の画像が現れません。とはいえ、このような映像産業の発展によってアラブ諸国のフィルムを、日本で学生とともに視聴できる条件が整い始めたのです。

筆者は1997年の愛教大分会6月例会において、「シネマ探索海外への旅—現代の映画と学生の関心」と題する報告を行い、その要旨を同年10月の『分会ニュース』に掲載させて頂きました。この一文を例会報告の続き、後日談としてお読みくだされば幸いです。

学問の自由と発展を求めて

—愛教大分会結成20周年—

AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION



日本科学者会議愛教大分会